

技術士包装物流会関西支部 30 周年記念議事録

平成 30 年 10 月 23 日
関西支部長 高垣俊壽
作 成 平田達也

開催日時：平成 30 年 10 月 20 日（土）

《記念講演》16:00~17:00 《関西支部創立 30 周年記念祝賀会》17:15~18:30

開催場所：大阪府門真市 パナソニック企業年金基金「松心会館」

《記念講演》2F 研修室 《関西支部創立 30 周年記念祝賀会》1F 大広間

出席者：合計 54 名

◆開会の挨拶・講師紹介：

前田副支部長の挨拶から始まり、有田先生の略歴・現在の活動について紹介された。

◆記念講演

演題：「過去・現在は未来のためにある」

講師・内容：有田俊雄 技術士（経営工学部門）

1. 自己紹介・経歴

(1) 大学卒業後の 20 年は生産技術、包装事業の立ち上げを行い、次の 20 年は三菱商事のパッケージ部門として事業を立ち上げ、技術開発や新規事業開拓を行われた。

現在はパッケージングストラテジー社と共に活動され、21 年になる。

振り返ると 20 年周期の三毛作となつたが、まだ 10 年は頑張りたいと抱負を述べられた。

(2) 日本パルプ社時代

1956 年の高度成長期に入社され、クラフト法パルプの生産技術に従事し、その後、塗工紙工場の立ち上げ、カートンシステム技術導入等に取り組まれた。

(3) ダイヤパッケージング社時代

・三菱商事社とのご縁で、1976 年に立ち上げた。モノを作らない会社でどのように会社を大きくするか・・・包装は変化するものであり、その変化の先を読むには日本に無い海外からの情報や技術入手することだと考え、それが現在の三菱商事パッケージ社となっている。

・会社立ち上げ時は最初 120 億円の売り上げであったが、有田先生は会社立ち上げ時に 500 億円にすると宣言した。当時の日本の包装産業が 5 兆円規模であったため、1% をシェアできないようであれば、作る意味がないと考えた為である。

20 年間頑張って 500 億円の目途が立った時点で次の会社に移籍された。

・1986 年に J P I 「21 世紀未来包装技術予測」ワーキンググループのまとめ役となり、2010 年を予測し透明蒸着フィルムや携帯電話等の予測を当てている。

・当時海外の小売業で普及し始めていた POS システムを国内で展開させた。

・物を作らない会社として脱酸素剤、深絞りサンドイッチ容器、インモールドラベル、カートン缶、ディスペンパック等、包装資材から包装システムや充填システムまで関わった。

(4) Packaging Strategies 社時代

日本の企業に 40 年籍をおき、日本の良いところも悪いところも解った頃、海外のネットワークができた為、次に軸足の片側を海外に置き、日本と海外の橋渡し役を務められた。

(5) 日本と海外の常識の違い

当時の日本の包装技術は優れていたが、ビジネスとして海外から見れば通用するものではない。特に経済的な発展が見込めない状況では、海外に目を向けなければならず、日本の常識を潰さなければならない。包装の脱ガラパゴス化が必要である。

(6) 東日本大震災で得た事

＜転ばぬ先の杖＞

緊急事態になってからでは遅い。常に事前対策を行う事。

<後悔先に立たず>

日本人はすぐにY e s を使い、後になって小声でB u t と言うが、海外では最初に「あなたが正しい」と言ってしまうと、それで終わりである。ダメと思ったら、最初からN o と言わねばならない。

<蟻の穴から堤も崩れる>

福島原発の予備電源のようにハイテク技術で構成されたシステムでも、技術レベルの最も低いところでシステムの価値となってしまう。

東日本大震災で日本人は変わったはずであるが、本当に変わりましたか？

それを皆さんに問い合わせをしたい。

2. 包装未来 2 0 3 0

(1) 今現在、有田先生の頭の中は「未来包装 2030 年」となっており、2030 年を念頭に近未来包装のメガトレンドを読み解こうとされている。

大きなキーワードは「循環型社会」と「デジタルネイティブな生活者」である。

海洋マイクロプラスチックは、去年のインターパックで既に問題視されており、日本人はその存在すら知らなかった。

(2) 未来包装研究会

現在の仕事と並行し、日本包装専士会理事メンバーの有志と共に 2 年半前から未来包装の調査・研究を行い、2018 年の東京 P A C K で発表を行った。

(3) パッケージを取り巻く世界共通の課題と背景

- ・世界の共通目標を国連が S D G s として纏めている。

- ・パッケージにおいては、温暖化ガスの排出抑制、フードロス削減、マイクロプラスチックの海洋汚染、循環型プラスチック社会等の課題があり、S D G s を中心に考えていかなければならない。

- ・忘れてならないのが、情報通信社会である。2006 年の i p h o n e 登場から人々が手軽に情報端末を持ち歩けるようになり、大きな進歩を遂げているが、これは包装とも非常に大きな関わりがある。

- ・一昔前の包装業界では「環境に優しい=儲からない」という認識であったが、ウォルマートは 2006 年に「サステナビリティーは環境に優しいではなく、輸送の合理化や省資源化によって無駄を省く事であり、ビジネスチャンスなのである」と発表し、世界的に考えが変わった。

- ・日本でもストローの廃止や、レジ袋有料化の法整備（罰則付き）の動きが出ているが、まだ石炭企業に投資している等、考え方方が世界に 10 年は遅れている。

- ・2018 年 6 月 11 日に G 7 にて海洋プラスチック憲章を発表したが、日本は調印せず、国内の報道も少なかった。しかし、海外では既に循環型社会に向けて進んでいる。

- ・2018 年 6 月 11 日の G 7 では、2030 年までに可能な製品についてプラスチック用品の再生素材利用率を 50% 以上にしなければならない目標を掲げている。日本では 1000 万トンのプラスチックゴミが排出され、そのうち 45% が食品用包装である。450 万トンの食品用包装を半分リサイクルすることになれば、プラスチックメーカーは大変なことになるが、紙・ダンボールやアルミ缶では実現できているので、プラスチックも循環できるように取り組まなければならない。

3. 日本型社会システムの崩壊

現在、昔ながらの日本型社会が壊れていっている。今、世帯数で多いのは職の無い単身世帯となっており、将来に不安を感じている人が増えている。しかし、そのような状況の中で明るい未来に変えていくストーリーを未来包装研究会で出しているので、是非包装専士会のセミナーを受けてほしい。

4. デジタル社会は包装メガトレンドの共通課題

IoP (Internet of Packaging : 繋がるパッケージ) は、パッケージがインターネットに繋がり、無人店の実現が可能となっている。それが Amazon Go である。

人は顔認証でキャッシュレスになれば、手ぶらで買い物できるようになる。

これからパッケージを起点として情報発信し、様々な事が実現できるようになる。

5. 時代を先取りする小売業の変貌

(1) スーパーマーケットはアメリカで 1962 年に始まり、50 年の歴史となる。

この小売業の最初の変化はセルフサービスで、次に出てきたのがバーコードである。

これによって売る人と作る人の立場が逆転してしまった。

最近はアマゾン社が小売りに参入し、ウォルマート社と戦う時代になった。

(2) Amazon Go について

会社の周辺に犬の遊び場があり、そのままオフィスに入ることができる。

従業員はサンダルに短パン、ポロシャツといったラフな格好で働いている。

アマゾン GO が一般公開されたので、登録してショップに入ったところ、商品はカメラ認識で商品の内容がすぐに判別できるようになっていた。

天井に沢山のカメラが設置されており、棚のものを取って店を出ると、数分後に買った金額分を引き落とされていた。

6. IOP に向けた国内の動き

(1) 経済産業省は 2025 年に CVS の全商品に IC タグを導入する目標を掲げているが、そうなると IC タグは年間 1000 億個必要となり、歩留まりを 100% としても 800mm 巾 × 4000m の原反が 2 万 4 千本必要となり、更に個別に情報を載せて使用するとなると、大変である。

(2) 未来型店舗はこう変わる

既にある IC タグ、顔認証、自動支払い等は当たり前となり、AI 稼働ロボットが店舗管理を行い、自動で商品をピックアップして宅配できるようになるが、既にアマゾンやウォルマートはもうじき始めようとしている。

7. 循環型社会を目指すための新素材、新技術

積層フィルムの回収技術、加工不良の手直し技術、樹脂リサイクル等、様々な新素材・新技術が登場しているが、日本発祥の技術はあまりない。

8. 日本における Terra Cycle Bridge

回収した容器で新たな製品を作る活動が大手企業で進められている。

今注目しているのは使い捨て傘で、金属の骨を外せばポリエチレンの塊なのである。

視点を変えれば、世の中には沢山リサイクルできるものがある。

9. 紙でできることは紙で

紙でプラスチックや金属に匹敵する物性を持たせる技術が進化している。

10. 終わりに

- ・日本のガラパゴス包装社会は、今後の世界的循環型社会に合わせて、大きく舵を切らねばならない転換期にある。
- ・変化は突然やってくるので、変化の先を読まなければならない。
樹脂メーカーが再生プラスチックを販売する時代が来るかもしれない。
脱プラスチックではなく、プラスチックを有効に減らして、リサイクルできるインフラ作りをメーカーに求められている。

講演会・懇親会風景



講演される有田先生



有田先生と野田会長



参加者全員



主催者挨拶の高垣様



総合司会の前田様



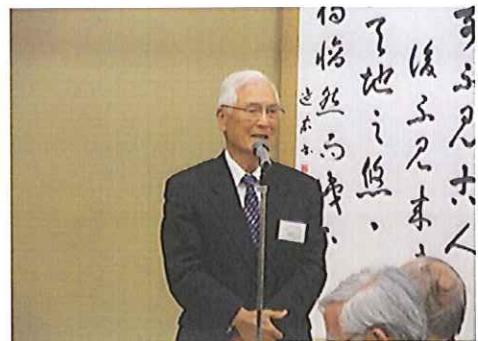
功労者表彰司会の真野様



乾杯の五十嵐様



祝辞の野田会長



経過説明の富士様



包装管理士会の桃川様



元産技研の野上様



兵庫県工業技術Cの佐伯様



神戸大学の斎藤先生



功労者（前田様・五十嵐様・富士様）



中締めの金井様



聴講風景



懇親会風景